

# 「短期集中型研修における教育効果と課題に関する研究」

—平成 19 年度福祉文化環境研修実践報告—

## A Study about the Educational Effect and Problem, in the Short Term Practical Training

石井 章 仁      清 水 正 美

Akihito Ishii   Masami Shimizu

### Abstract

In this report, we analyzed this year's program of "The Social Welfare and Culture, Studies Program".

Secondly, we clarified learning and the problem, of the student by the training of the for a short term intensive model. Thirdly, we clarified the effect and the subject for the autonomy and the institution of the acceptance side.

As a method to clarify these, we performed question and hearing investigation for the students and the institutions, the autonomy.

As a result, an amplification some effect of the education became clear by learning by the pressure from the person concerned, a friend accompanied by and information sharing to depend to look back in the training of the for a short term intensive model.

In addition, substantiality of the learning was found for a problem for the method of prior and after learning

### 1. 研究の概要

本研究は、本学福祉総合学部で2007年8月に実施された「福祉文化環境研修」において、どのような教育効果があったのか、また、次年度へ向けた課題は何かについて明らかにするために行うものである。

福祉文化環境研修は、岩手県宮古市における高齢者福祉の実践と行政の役割について学ぶことを目的として2000年より行われ、すでに今年度で8回目の実施となっている。受け入れとプログラムの計画の担当を市役所介護福祉課が行い、その中で事前学習(市の福祉等について)を設定し、実地研修(施設介護、在宅介護、介護予防)を行い、事後学習(発表)についても行っている。

本研修は、いくつかの社会福祉の資格取得に必要な法的な実習とは大きく異なる特徴をもっている。まず第1に、行政と協働した実習であること。第2に、学校から離れた遠方地における短期間の宿泊型研修であること。第3に、半日あるいは1日単位でプログラムが細かく設定されているこ

と。第4に学生の参加は自主的なものであり、かつその学年はさまざまであること。第5に介護予防から在宅介護、施設介護など、介護サービスを網羅できる体験するプログラムとなっていることである。

こうしたいくつかの点が、それぞれ学生の学びについてどのような効果があり、また課題や配慮事項はどのような点かといったことについては、これまであまり明らかにされてこなかった。

今回、平成19年度の本研修プログラムを通して、この研修プログラムの学生に対する効果と課題に焦点を当てて、評価し明らかにすることによって、次年度の計画策定や今後の本研修のあり方を考慮する上での一つの題材となるべく、研究を進めていくこととした。

## (1) 福祉文化環境研修の概要

### 1) 研修の概要

表1 平成19年度福祉文化環境研修（日本）日程

日 程	日	時間	内 容	研修のポイント
1日目	8/27	午前	東京駅集合	移動
		午後	宮古駅前着（宮古泊）	
2日目	8/28	午前	市役所における事前学習 ・市の福祉政策（宮古市長） ・市の福祉全般の概要（地域福祉課） ・市の介護福祉の概要（介護保険課）	市の福祉政策の学習
		午後	実習施設挨拶回り（8施設）／災害弱者に対する支援について（消防署）／宮古市内の見学（魚市場、浄土が浜、県立水産科学館等）	施設への事前訪問 消防署見学 市内の見学
3日目	8/29	終日	7施設（老人保健施設・デイケア、デイサービスセンター、グループホーム）	デイサービス施設等での施設研修（各2～3名）＊教員の巡回指導
4日目	8/30	終日	6施設・機関（訪問看護ステーション、訪問看護・訪問介護、市介護保険課）	訪問介護・看護等、在宅介護サービスの研修（各2～3名）＊教員の巡回指導
5日目	8/31	午前	市健康課による地域健康教室に参加 （健康相談時の体力測定の補助）	自立高齢者との交流
		午後	市役所にて研修のまとめ	研修のまとめ
			観光（遊覧船・物産店）	観光
6日目	9/1	午前	宮古駅前発	移動
		午後	東京駅着 解散	

福祉文化環境研修は、約1週間にわたって行うため、夏期休業期間中に設定をしている。本年度の日程は、8月27日（月）～9月1日（土）の5泊6日となった。

本研修に参加した学生は、福祉総合部福祉文化学科3年生1名と2年生10名、福祉総合学科1年生4名の合計15名である。男子が7名、女子が8名であり、引率教員は2名であった。いずれも、社会福祉士実習を未だ行っていない学生であり、社会福祉の現場に「実習」として入る経験をしていなかった。また、学年は幅があるため、普段それ程お互いに交流があるわけではなく、この研修を通じて知り合い、はじめて会話をもった者も多かった。

## 2) 内容・実習プログラム

アクセスの関係で、1日目を移動に費やし、2日目より本格的な研修を行った。2日目は市役所へ登庁し、市長より市の福祉政策の講義や地域福祉課による宮古市の福祉全般概要の説明が行われた。午後には実習先の施設への事前挨拶、消防署での防災設備の見学等を行った。また、市内の主な観光スポットである魚市場や海岸、県立水産科学館を見学し地域理解も深めた。

3日目、4日目は終日、各グループに分かれて直接的な福祉体験の研修を行った。3日目には施設にデイケアやデイサービスを利用している利用者との関わりを中心に体験し、4日目は直接利用者のご自宅に訪問し訪問看護や訪問入浴を行う場面を見学・体験した。

5日目は、午前中、市健康推進課による地域健康教室に参加し、健康診断や介護予防のための体操をしながら高齢者との交流を図った。午後は主に3、4日目の福祉体験のまとめとして、学生が一人ひとり研修を振り返っての感想や意見、学んだことについて市役所の方々に報告した。6日目の最終日は東京への帰路へ着いた(表1)。

## 3) 実習施設種別

3、4日目の直接的な福祉体験の研修では、施設利用者の理解のため高齢者施設においての実習と在宅でサービスを受ける高齢者理解のために、在宅への訪問介護・看護実習とを行った。

3日目の「施設研修」の種別は、デイケアが2施設、デイサービスが4施設、グループホームが1施設であった。4日目の「在宅研修」を受けてくださった事業所の種別は、訪問看護が3施設、訪問介護が3施設、訪問入浴が1施設、運動指導事業が1施設であった(表2)。

表2 平成19年度福祉文化環境研修配属施設名と種別・配属学生人数

### \*3日目研修：施設研修

NO	施設	種別	人数
1	A 施設	老人保健施設・デイケア	2人
2	B 施設	老人保健施設・デイケア	2人
3	C 施設	デイサービス	3人
4	D 施設	デイサービス	2人
5	E 施設	デイサービス	2人
6	F 施設	グループホーム	2人
7	G 施設	デイサービス	2人
	計		15人

#### \*4 日目研修：在宅研修

NO	施設名	種別	人数
1	H 施設	訪問看護	3人
2	B 施設	訪問看護、訪問介護	2人
3	I 施設	訪問看護	2人
4	D 施設	訪問介護、訪問入浴	2人
5	E 施設	訪問介護	2人
6	市介護保険課	訪問指導	2人
7	市介護保険課	運動指導事業	2人
	計		15人

#### 4) 事前・事後学習

研修の前に、大学において3回の事前学習を行った。これは短期集中研修をより充実したものとなるよう、基礎的な介護保険制度や福祉施設の概要を説明するために行っている。

第1回ではメンバーの自己紹介とともに、宮古市の概況について「宮古市の福祉行政」という冊子を参考に説明を行った。第2回では「介護保険制度と福祉施設」について、講義とVTRによる説明を行った。第3回は最終的な日程の確認と研修で訪れる配属施設の発表や説明を行った。

事後学習は、11月30日に1回のみ開催した。ここでは、研修の全体を総括しながら研修報告書作成についての指導を行い、その後、研修を振り返っての意見や感想を記入し、2グループに分かれてふりかえりを行った。

### (2) 先行研究から

#### 1) 宮古市に関するもの（市の特徴、福祉サービスなど）

宮古市の福祉行政に関する先行研究は、本学でこの地域環境研修がスタートした翌年平成13年度から3年間継続で調査をした『社会支援ネットワークの構造と機能に課する実証的研究—岩手県宮古市の分析をとおして—』がある。これは研修の引率担当をした教員が、研修を契機にして宮古市の福祉ネットワークの状況をヒアリング調査等によって明らかにした。

また、この研究では、宮古市における「社会支援ネットワーク」を実証するのを目的として、宮古市における各セクター（営利セクター、非営利セクター、公的セクター、インフォーマルセクター）とそのネットワーキングの構造を明らかにする試みを行った。

この中での「社会支援ネットワーク」とは「日常生活の困難を解決するために、地域社会の中に多様に張り巡らせた、住民や専門職が相互に連携し形成するネットワーク」と定義し、「公的セクターの特徴と関係セクターとの連携状況」や「地域を基盤としたセクターの構造と支援ネットワーク」、「非営利・営利セクターのネットワークの特徴と関係セクターとの連携状況」を明らかにした。

その上で、宮古市における社会支援ネットワークの構造と機能の鳥瞰図を表したが、結果として見

えてきたことは、当初位置づけていた各セクターが、ケースによっては他のセクターと重複した役割を持っており、「中間セクター」といった位置づけとなることが明らかになった。よって、各セクターが独立した構造ではないことが見えてきたのである。さらに、それらのセクターが他のセクターと円滑なネットワーキングによって社会福祉サービス提供に反映されていることも実証された。

## 2) 実習に関する先行研究（実習の効果、実習の課題、期間についてなど）

福祉や教育を学ぶ学生が、実習をする機会は、主に資格取得のための法定の教科目で行われることが多い。しかし近年、こうした最低限の法定実習にこだわらない、自由な形態の実践的な学びが行われているケースもある。また、実習においては、通常「事前学習」「実習」「事後学習」の流れを経て評価に至る過程を持つことが多い。

社団法人全国保育士養成協議会による「実習教育におけるミニマムスタンダード」（2005）によれば、実習の学習は、「計画→実施→評価」の「らせん状の学習モデル」であるとしている。その中で、実習前指導を、「①実習の意義・目的・内容の理解、②実習の方法の理解、③実習の心構えについての理解、④実習課題の明確化、⑤記録の意義・方法、⑥計画の理解、⑦実習施設の理解、⑧事務手続き、⑨直前の指導」の9項目に分類している。また、事後指導の内容として、「①実習内容の確認、②施設からの評価、③今後の方向性の明確化」の3項目としており、なかでも、①実習内容の確認では、「内容の報告、課題の達成状況の報告、体験の整理、悩みの相談、体験を報告し合う機会」の5つを提示している。さらに、実習評価が「次の計画に生かされ、サイクルの個々の行為の質がらせん状に徐々に向上していく学習モデルである」という考えのもとで、事後指導の充実・活用の必要性を特に指摘している。

笠間（2000）は、北海道教育大学釧路校教育学部における「親子遊びの教室」の実践において、参加学生の実践的学びを「プランニング→環境構成・準備→指導（参加・対応）→評価（反省・課題把握）→プランニング」というサイクルで行った。その実践の中で、「指導課題の明確化」、「学習課題の明確化」、「責任の自覚化」「実践課題への着実なフォローとフィードバック」が可能であるとした。すなわち、こうした学生参加のプログラムにおいても、「計画、環境構成（準備）、実践、評価」という基本的なプロセスが必要であり、実践の中でこそ、指導課題や学習課題、責任、実践の課題等が明確になるというものである。

石井（2005）は、ゼミナールで主催した子育て広場を学生が主体となって作る過程から、学生主体の個人の感想カードから、学生の意識の変化を分析し、「保護者に関わろうとする意識」が関わることによって「日常的な関わり」へ変化したとしている。また、学生が「保護者からの関わり」によって、主体的に変化したとも述べた。

上記のような長期の実践であれば、対象者との関わりや対象者の理解が進み、より課題や学びの効果が明確化するという側面があると考えられる。しかし、短期型の研修において、こうした課題の明確化および自己の学習につながるものがどの程度可能となるのであろうか。先行する研究の中には、残念ながら本研修のように短期の宿泊を伴った研修において、どのようなプログラムを設定し、その中で、計画、実践、評価をどのように行い、それが学生にとってどのような学びと課題を得たかという命題について明らかにしている考察はない。したがって、本研修のあり方について検討するために

は、単年度の丁寧な分析と一定年度の長期的な評価が必要になってくるのである。

### (3) 本研究の目的

本研究の目的は、第1に平成19年度福祉文化環境研修を様々な視点から事後評価・検証することによって、次年度の計画作成の基礎資料とすることである。第2に、こうした、短期集中型の実習により、実際に参加学生はどのような学びを達成し、課題が何であったかを明らかにすることである。そして第3に、これまで受け入れ自治体や施設の事後評価を行われてこなかったが、受け入れ側の自治体、施設にとってこの短期集中型研修はどのようなものであったか、また、その効果と課題を検証することにある。

## 2. 研究方法

本研究は、「学生にとっての研修」、「自治体にとっての研修」、「施設にとっての研修」という3つの観点から、その効果と課題を明らかにするものである。したがって、その分析においては、以下の4つの方法を取りながら総合的に考察する。

具体的には、まず参加学生の研修中の振り返りの内容から、研修中どのように、メインとなる施設・訪問介護実習が位置づけられているかを分析し、事後のふりかえり時に参加学生へのアンケート調査を実施し、グループヒアリングで補足した結果から、学生にとっての研修の成果と課題を考察する。また、市担当者へのアンケート調査を実施し、受け入れ行政の意識と配慮について明らかにする。さらには、実習施設へのアンケート調査およびヒアリング調査から、施設側の意識と配慮等について明らかにする。故に、上記の観点からの評価を総合し、それぞれの分析結果から本研修における効果と課題について考察する。(研修や調査に協力して下さった行政、施設、利用者、参加学生等のプライバシーに配慮し、個人情報等については細心の注意をもって取り扱う)

### (1) 研修中のふりかえりおよび参加学生への研修後アンケート調査

#### 1) 研修中のふりかえり

研修中に毎日実施した「一日のふりかえり」(各日1時間程度)の中で、3日目(2007年8月29日午後8:00~9:00)と4日目(2007年8月30日午後8:00~9:00)の施設及び訪問介護実習後のふりかえりについてそれぞれの発表した学生の要点を抽出する。

#### 2) 参加学生への研修後アンケート調査

質問項目14(選択式+記述式)のアンケート用紙を事後学習の際に配布した(2007年11月30日)。配布数は、事後学習に出席した学生数14であり、回収数は14であった(回収率100%)。

### (2) 宮古市担当者へのアンケート調査

質問項目(選択式+記述式)のアンケート用紙を電子メールにて発送し、電子メールにて回収した。配布数は1であり、回収数は1であった(回収率100%)。市担当者に市の意義・方針として回答していただいた。

### (3) 実習施設へのアンケート調査+ヒアリング調査

#### 1) 施設へのアンケート調査

研修を行った8施設(重複する法人には合わせて1通)に郵送し、FAXで回答を回収した。回収数は6であり、有効回答率は75%であった。送付期間は、2007年11月12日～21日である。

#### 2) ヒアリング調査

アンケートに「ヒアリング調査可能」と答えた2施設へ電話によるヒアリング調査を実施した。実施日時は、2007年12月12日、午後14:00～14:20および14:30～15:00である。

## 3. 結果

### (1) 研修中のふりかえりの内容

毎日、その日の研修の様子をふりかえり、翌日のスケジュールの確認等を行うために、ふりかえりを行った。とくに施設での実習を行った2日間は、これを集中的に行った。学生それぞれが様々な視点で見たものを持ち寄り、他の学生の意見も参考にし、また困難だったことに対して意見を交換しながら支え合うという目的で行った。

#### 1) 施設実習のふりかえりから

本格的な実習の初日ということもあり、緊張しながら実習を行っている様子だった。はじめての施設で、はじめての利用者の方、職員の方と接する緊張感と不安があった様子である。しかし、利用者から話しかけられて安心したり、職員の方の姿を見て学んだりする姿もあった。以下表3-1から表3-7まで学生のふりかえり学習の際の発言を整理し、抜粋したものを示す(施設名は、表2に基づく)。

表3-1 施設実習(3日目)ふりかえりから G施設

<p>b:職員の方からお年寄りと自由に過ごすように言われた。すると、子どもも入ってきた。この施設は子どもも利用していたのだ。子どもと高齢者が一緒に過ごしており、それぞれ生き生きしていた。帰りの送迎の際に「またきてね」と手をつなぎながら利用者から言われた。</p> <p>c:高齢者と知的障害児、さらに学童児がいる施設だった。法人理事長が、「そもそも高齢者と児童をわけるのはおかしいのではないか」とおっしゃったのがとても印象的だった。</p>
--

表3-2 施設実習(3日目)ふりかえりから D施設

<p>d:気を配りながら一緒に階段を上り下りして、気をつかうことがわかった。はじめは話しかけられなかったが、利用者の方から話しかけてくれたので話せるようになった。そうなると話しやすかった。</p> <p>e:職員の方が利用者を送るバスが、見えなくなるまで手を振って見送っていた。こうした少しの心がけが大事だと知った。</p>
--

表3-3 施設実習（3日目）ふりかえりから E施設

f:水分補給が大切なことを知った。服の着脱の際に同性介助が基本となることが大切だと知った。

g:寝たきりの方に服を着せるときに手すりにつかまったまま動かなくなり、30分くらい時間がかかってしまった。おやつの際にまったく話せなかった。話題がない。利用者の方に名前を覚えてもらった。羞恥心の話、方言の話を聞いた。

表3-4 施設実習（3日目）ふりかえりから B施設

l:リハビリスペースとの壁がなく、オープンなスペースだった。いろいろなお年寄りがいてコミュニケーションをとるのが難しかった。

m:右手が動かないのに折り紙をおっていた方がいた。文鎮などおもりを使っていた。「両手を使えるあなたは、何でもできる」と言われた。車いすは、大学の授業(福祉疑似体験)を思い出した。自分から話しかける、その一言がむずかしかった。

表3-5 施設実習（3日目）ふりかえりから C施設

h:送迎車内で利用者の方のおしゃべりの様子を聞いていた。政治やぐちやいろいろ聞いた。「会話に混ぜてください」と言って、いっぱい会話をした。地域の事や私の地元の事を話した。病院の事も教わった。いろいろ驚かされた。

i:利用者の方に方言を教えてもらった。

j:最初は少し緊張していた。お茶をくみ、後半には会話ができた。お茶出ししながらスタッフの方が利用者の方との仲立ちをしてくれた。

表3-6 施設実習（3日目）ふりかえりから A施設

m:私は岩手県出身なので、それを話題にすることができた。

o:送迎の車内で話しかけてもらった。よく話せたと思う。レクリエーションをみなさんの前に出てやった。利用者の方々に帰りにお礼をいった。「ありがとう」「がんばってね」といわれ、うれしかった。運転手の方に、利用者への言葉づかいには気をつけるよう教わった。

表3-7 施設実習（3日目）ふりかえりから F施設

k:名前が出てこない利用者の方が出て、自分の名前を「忘れた名前だ。すてたい」といった。自分が忘れたことを一生懸命かくすことがあるそうだ。職員の方は、それを悟ってもそう指摘せず、思い出させるように関わっていた。

a:まるで施設のような広さのグループホームだった。その環境をなんとか家庭的にするために、コミュニケーションを家庭的にしようとしている。「親子」みたいに関わるなど。たとえば方言だったり、小さい声だったりして利用者の方の言葉がわからないことがあった。プライドが高い、あるいは忘れたくないという気持ちがあることを知った。

## 2) 訪問介護実習のふりかえりから

実習も2日目となり、緊張も解けてきたようであった。見たこと、聞いたことなど、前日と比べて観察した内容が多かったが、職員の動きや利用者の関わりから吸収しようとしている様子がみられる。また、前日施設における介護を体験したため、在宅での介護について、施設で感じた感想とは違った視点となっている。

表4-1 訪問介護実習(4日目)ふりかえりから H施設

i: 援助者として気をつけること「表情に体調を出さない」「たった一言が人の心をきずつけるたった一言が人の心をあたためる」ことを知った。足を洗っている時、嬉しそうな顔をしていた。水分が回らず足がむくんでいた。床ずれ防止用のマットを使っていた。喉とおなかに穴があいていて、初めて見たので驚いた。

j: 特殊な難病の患者の方がいた。なかなか出会う機会がないので貴重だった。

表4-2 訪問介護実習(4日目)ふりかえりから I施設

f: 訪問看護はアポイントをとってから行っていた。血圧、脈拍、体温、呼吸などの値を測定していた。ねたきり意識レベル220の方がおり、眼で訴えるしかない様子だった。

g: 右半身まひの方宅に訪問させてもらった。言語障害があつたがいろいろ話をした。チューブの交換や排泄介助を見学した。利用者の方に「老人を好きになって下さい」といわれた。24時間対応できるように、利用者の担当を固定せず、いざという時に全員対応できるようにしていた。

表4-3 訪問介護実習(4日目)ふりかえりから B施設

d: 意識レベルが低い人には表情を見て話しかけることが大切であると知った。職員の方が「利用者さんに笑ってほしい、帰りに笑って帰ってほしい」とおっしゃったのが印象に残った。

e: 午前はねたきり男性の自宅に訪問した。世間話をした、おじいさんのことなど。ホームヘルパーの方が料理する際本人の口に合うようにするのが大変だと知った。利用者にも味見してもらい、また買い物などはメモを書き必ず確認してもらうことが大切だと知った。

表4-4 訪問介護実習(4日目)ふりかえりから D施設

c: 体が不自由なのに整頓され、きれいだった。顔を洗い、うがいをしてお手伝いをした。利用者の家族との触れ合いを大切にすることを学んだ。整理整頓をし、はじめの状態にしておくことが大切。また基本的に本人の力でやりできないところの補助を行うことが大切だと知った。

a: 食材の切り方など確認して行ったり、掃除も確認していた。我々が「なぜできないの?」というところができない。煮こぼしなどは、1時間では調理がむずかしいとヘルパーの方が言っていた。

表4-5 訪問介護実習（4日目）ふりかえりから 市介護保険課

b:①80 歳代女性、1人暮らし、近所から孤立しており、訪問時デイサービスを週1回行くかどうか話を職員の方としていた。②徘徊、幻覚、近所に侵入など近隣からのクレームもある。実際に近所の人に話を聞いていた。アポイントを取らずに直接行くようだった。アポは契約更新時のみ。それはくるからといって気を使わせないようにとの配慮からだという。

l:午前中は、運動指導、体力測定など行った。数字にすると目安になるようだ。利用者がスカートをはいていた。その方はいつも外出時に和服を着ているが夏はスカートが多いそうだ。

m:耳が聞こえない方のところへ行った。やりとりは筆談、私にとってはじめてのコミュニケーションだった。うまくできるか心配だったが、筆談中冗談もいってくれた。日常的な連絡は FAX をつかっている。チャイムは光が出るものだった。不自由さを感じさせないほどもだ。はじめから聞こえない人はうまく話せないが、中途障害の方は言葉は話すことができるということを知った。

k:103 歳のおばあさんが、ピアノをととても上手に弾いていた。口調もはきはきしていた。アドバイスを的確にしていた。相手の真意を汲み取ることが大切なアドバイスである。

### 3) 学生のふりかえりの考察

#### ①施設実習

内容は、利用者との関わりから得たものと、職員から学んだことから得たものが主だった。利用者から学んだことについては、利用者と話ができたこと、名前を覚えてもらったこと、方言を教えたこと、話しかけていただいたことなど、関わりを持つことができた喜びが表現されていた。実習初日ということもあり、利用者から何かを学ぶ以前の、関わりに関する嬉しさや難しさといったものがメインテーマとなっていたことがうかがえる。

一方、職員からの学びについては、職員の事前指導、実習中の利用者への仲立ち、送迎バスを見送る後姿からなど、1日の様々な場面における様々な関わりの中で学んでいることがうかがえる。なかなか関わりをもつ時間自体は多く持てないが、その中から最大限吸収していたようである。

#### ②訪問介護（看護）実習

訪問介護（看護）の実習からは、利用者からの学び、職員からの学び、地域の理解という3つの学びがあった。利用者からの学びは、初日よりやや深い関わりがあった。

たとえば、通常お会いすることがないような特殊な難病の利用者との関わり、耳が不自由な方との関わり、筆談、ピアノを弾く方など、より深いやり取りや、趣味や服装などよりプライベートな場面でのかわりなどが見られた。また、訪問介護・看護の場面では、職員の介護・看護を見たり、食事を作る際の確認の方法、課題などを知ったりと、職員の姿から学んだ点が強調されていた。さらに、聴覚障害の方の生活や、地域から孤立している方の現実、訪問時のアポイント、地域で介護を受けながら生活する課題など地域で暮らす高齢者の現実を知ることができた。

### (2) 参加学生へのアンケート調査

参加学生14名(15名中)に、研修の研修参加学生の参加動機や研修の自己評価について知るため、ア

ンケート調査を行った（調査項目は文末資料参照）。

1) 参加した動機と、参加にあたっての家族への相談の有無について

①参加した動機

参加したきっかけは、「現場での実習を体験したかったから」が最も多かった。次いで、「高齢者介護に興味があったから」「宮古市の福祉に興味があったから」「就職先の職種を考えたいから」が多かった。

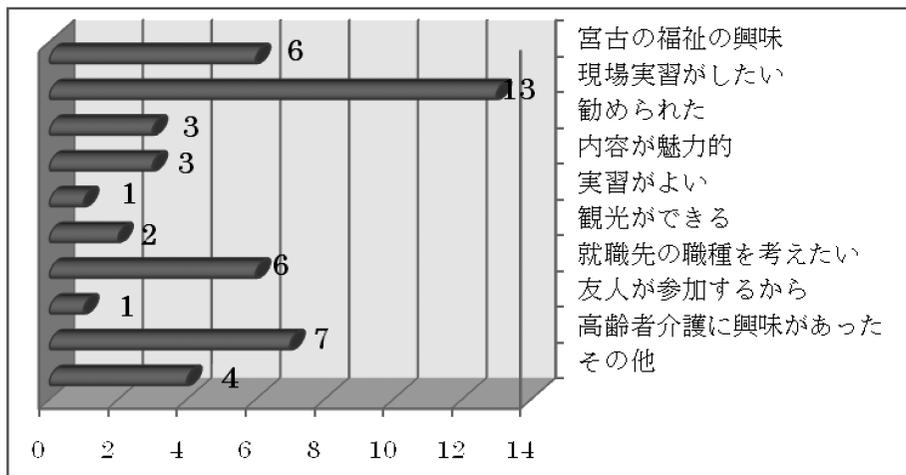


図1 参加したきっかけ

②参加にあたっての家族への相談の有無

家族への相談を「した」と答えた者が8名おり、そのうち5名が金銭面の相談をしていることがわかった。短期集中型で宿泊を伴うこうした研修の参加にあたっては、参加費の問題が学生の参加に関わってくるのがわかる。

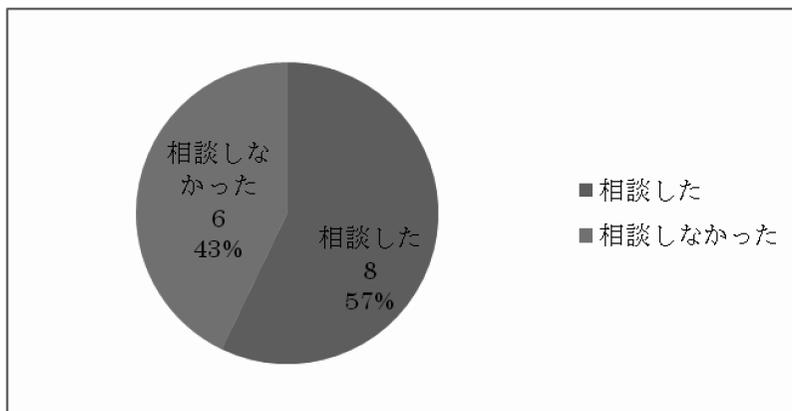


図2 研修参加の意向を家族に相談をしたか

## 2) 研修の内容で満足度の高かったものとその理由

研修内容で満足度の高かったものを3つずつそれぞれ選択した。高かったものは、「施設実習」および「訪問介護（看護）実習」であったが、「市役所での事前学習」や「実習後の夜のふりかえり学習会」をあげた者も多かった。

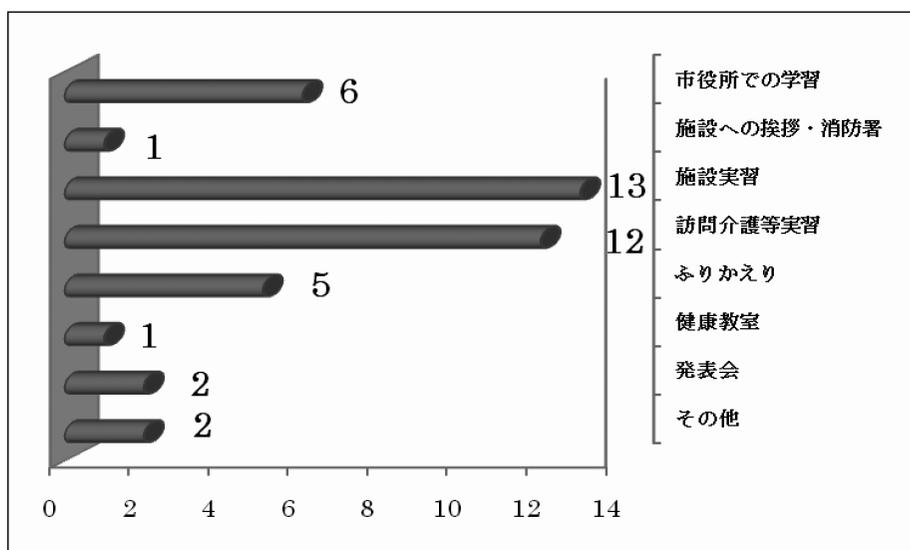


図3 満足度の高かった研修内容

施設実習および、訪問介護（看護）実習を選択した理由で多かったものは、「利用者の方と接することで得られたものがあつた（8）」「実際に施設を体験することができた（5）」というものであつた。一方、訪問介護（看護）実習を選択した理由は、おおむね「これまで体験したことがなかつた訪問介護（看護）の現場を体験することができたから」という訪問介護の理解・体験が主だつた。

また、「市役所における事前学習」を選択した理由は、「福祉行政に興味があつた（1）」「宮古市の福祉の概要を知ることができた（3）」「市長ほか職員の熱意（2）」であつた。さらに、「実習後の夜に行われたふりかえり」を選択した理由は、「他の人の体験や考えを聞くことができ、自分の学びとなつた（5）」という「体験の共有」であつた。

## 3) 研修前に学びたかつたことと実際に学んだと思うこと

表5を見ると、ほぼ事前に学びたかつたことが実現されていることがわかる。また、「介護予防」や「保健・安全」「家族についての理解」については、学びたいと想定してはなかつたが実際には学んだというものも複数いた。「その他」では、「災害弱者への取り組み」「コミュニケーション（2）」「援助者としての心構え」「様々な観点からの福祉行政の手法」となつていた。

表5 研修前に学びたかったものと、実際に学んだと思うこと

選択肢	学びたかったもの	実際に学んだもの
高齢者福祉の実際	11	9
地域福祉についての理解	7	6
援助者の専門性について	4	3
家族についての理解	1	3
介護予防について	4	7
訪問介護の実際について	9	7
相談援助等の実技	3	4
介護技術の実技	9	5
施設の運営について	3	3
宮古市の福祉について	7	7
保健・安全について	0	3
その他	2	5

(複数回答:回答数3以上のものを提示)

4) この研修を通して身に付いたもの、研修後変わったと思うこと

①研修を通して身に付いたもの

すべての参加者が「あった」と回答した。その内容は、「利用者との関係(9)」「福祉の現場の理解(3)」が多かった。また、研修後「以前よりあいさつをするようになった」「ボランティアに行った時に自分から話しかけることができた」など、研修後に実際に変わったことを体験した者もいた。

表6 研修を通して身に付いたもの(自由記述)

利用者さんと一緒に楽しむ
利用者さんとの接し方。市長と市民の関係
以前より、あいさつをするようになった気がする…
福祉の現場の雰囲気、現状の内容を知ることができた。
相手の気持ち、思いやり
人とのコミュニケーションのとり方
コミュニケーションの取り方
さまざまな観点から福祉を考えることの大切さ。
高齢者の人たちとの接し方
利用者施設の方との強いキズナ(信頼関係)の築き方を学んだような気がしました。
利用者の方と積極的に接するという事
自分の体調が悪いことなどを表情に出してコミュニケーションをとってはいけないこと/言葉だけじゃなく、手をつないだりして感覚で言葉を交わすこと
福祉のこれからのあり方について自分なりの考え、自信。
コミュニケーション能力。理由:ボランティアに行った時に私から話しかけることができた

## ②研修の前後で、自分自身が変わったと思った点

13名の参加者が「思った」と回答した。その内容は、「社会福祉への理解、考え方や取り組み方が変わった(8)」「職業、将来について考えた(1)」「積極性が出た(2)」などがあげられた。また、「後期の授業に生かしている(1)」という回答もあった。

### 5) 研修の全体的な感想

研修の全体的な感想では、実習についての様々な学びについて記述するものが多かった。「利用者とのふれあいから学ぶことがあった」といった利用者との関わりについてのものや、今後に向けて、「自分自身の課題が見えた(2)」「自身の考え方が変わった」など、自分自身についてのものが多かった。

一方、「福祉を推進する行政の取り組みがわかった(3)」など、福祉行政への興味・理解を示すものもいた。これは、宮古市長をはじめとする市職員との関わりや事前学習、発表会、懇親会などによって、築かれたものであるといえる。

### 6) 実習について

#### ①困ったこと、不安について

「あった」と回答した者は11名であった。「初めての实習なので知識・技術等が不安(4)」という自分の経験不足・知識不足からくる不安と、「利用者・職員に受け入れられるか(5)」という対人関係への不安を抱くものに大きく分かれた。

表7 研修後変わったと思う点(自由記述)

いろいろな福祉を深く見るようになった。
甘い考えでやってはいけないという責任感が出てきた。
先生や先輩と仲良くなることができ、学校生活まで充実した。授業の中でこの学んだこともできて授業が楽しい。
就職について、将来について考えました。
いろんな世代の人と交流したいと思った。
福祉についての考え方が変わった。
実技はもちろんだが、制度や財政など社会全体を見て福祉を考えなければいけないと思ったと同時に、学習意欲が高まった。
高齢者や障害者の人たちに対する考え方
壁に当たっても明るく元気に一生懸命生きようと思いました。
高齢者の方と接することで「認知症だから」などの偏見がなくなった気がする
自分から声をかけられるようになった
何事へのチャレンジ精神、他人との交わり合い、福祉に対する考え方
運動を通して、要介護要支援にならないよう予防する取り組みに興味を持った。保健師や健康運動実践指導者についてもくわしく知りたいと思った。

## ②実習で何を学ぶことができたか

「現場の厳しさ」「多様なコミュニケーション（４）」「自分の限界」「介護予防の重要性」など、学んだ点は様々なものがあった。たとえば、バスがいなくなるまで手を振っている職員の姿から「利用者への気づかい」を学ぶ者もあった。

## ③実習についての意見

「実習先を選択したかった」という意見もあったが、ほぼ意見はなかった。子どもと高齢者がともに過ごす施設での実習について「とても勉強になるため次の研修生の方にも勧めたい」という意見もあった。

### 7) 一緒に参加した仲間が支えになったか

すべての参加者が「大いに支えになった」と回答した。「相談した」「助けられた」「情報が開けた」「いるだけで安心した」「気分転換ができた」といった回答があった。本研修のような、宿泊をともなう短期集中型の実習の場合、こうした仲間との関係が重要になることがわかる。

### 8) このような研修に再び参加したいと思うか

再びこのような短期の集中的な研修（実習）の機会があれば、参加したいと思うかという問いに対しては、「思う」が10「どちらともいえない」が4だった。これは、この研修での達成感や満足感が次の研修の機会をより好意的なものにしていることがわかる。

### 9) 参加学生へのアンケート調査の考察

学生アンケートからは、次の5つの点が明らかになった。第1に、学生の学びの大半は、「利用者や施設職員からの学び」であったことである。この短期集中型実習の最も核となる2日間の実習において、現場の方から学んだことが多くあったことがうかがえる。そして第2に、「実習前の不安は大きかったが、それ以上に得るものがあった」今回の参加者は、全員実習前の段階で参加しており、現場とくに利用者や職員との関わりに不安を持ちながら参加していたことがわかった。しかし、その不安を払しょくし、学びに変えるほど、多くの学生が充実した実習を行ったことがアンケートから考察された。第3に「施設、訪問（在宅）、予防という流れの理解」である。第4に研修を有意義にさせたのは、「一緒に参加した仲間の支え」があったからだと考えているものが多かったことである。さらに「福祉行政への興味・理解」がなされたことである。これは、市長および市の担当者のご尽力のたまものといえよう。

さらに、「実習の期間が少なかった」、「実習先の選択がしたかった」、「実習した施設は勉強になったので、次年度の参加者にも行ってほしい」など、さらに研修を充実させるための意見もあり、今後の参考となった。

## （3）市担当者へのアンケート調査

研修の受け入れ側である市役所の中で、主に実習施設や大学との調整を行ったのは市介護保険課長であった。受け入れ行政の受け入れ態勢の実態やご意見などを伺うためにアンケート調査を行った。

1) これまで福祉に関する実習や研修の依頼を受けたことがあるかどうか、また、実習や研修を受け入れるにあたって、行政としての方針等があるかどうか「実績はあり」、内容は「①ソーシャルワーカー

現場実習 14 日間（県立大学）、②社会福祉援助技術現場実習 23 日間（医療福祉専門学校）、③地域保健実習 7 日間（県立大学、県立高等看護学院）」であった。

実習や研修を受け入れるにあたって、行政としての方針等があるかどうかについては、「とくにない」とのことであった。

また、今回の研修を受け入れるにあたって、連携をとった行政内の部署は、「保健福祉部福祉課、健康課、総務企画部企画課（秘書室）」であった。

## 2) 地域文化環境研修を受け入れるにあたって行政としてメリットと判断したこと

メリットは「あった」とのこと、その理由としては、「人に教えるためには勉強しなければならず、教えることにより曖昧になっていた知識等を再確認することができるものと考えます。また、職員にとってもいい緊張感を生み、自分たちのレベルアップにもつながっているもの」であった。

また、現在市では事務事業評価を実施しており、「研修を受け入れることが第三者評価と受け止めています」とのことであった。

## 3) 地域文化環境研修を受け入れ、スケジュール内容等をきめるにあたって、配慮したこと

スケジュール内容等をきめるにあたっての配慮は、「実習が短期間であることから、①施設における実地研修、②在宅サービスに係る実地研修、③自立高齢者との交流を通して、高齢者の実態や介護の現場と当市の高齢者施策についていくらかでも理解していただきたいと考え内容等を決めています」とのことであった。

## 4) 実習を受け入れた各施設などへの連絡・連携などで配慮していること

「毎月開催している地域ケア会議等で事前に協力要請をし、日程や人数などが決まった時点で正式に施設長等に連絡し、受け入れを了承してもらっています」とのことであった。

## 5) 今年度の地域文化環境研修で、学生に対して効果的だったと思う点

「今年度に限ったことではありませんが、学生が現在生活している地域や出身地以外の場所で、施設や在宅サービスなど複数のサービスを通じて介護の現場を体験したことは、福祉に対する見識を深めるとともに、人間的にも成長ができたのではないかと思います」とのことであった。

## 6) 今年度の実習の課題および研修の運営面についてのご意見やご要望

「研修 5 日目の地域健康教室については、健康課で計画した教室を活用していることから、地域により利用者が少ない場合があり、検討の必要があるものと考えています」とのことであった。

運営面についてのご意見やご要望については、「感染症対策として「検便検査」を義務付けている施設もあり、受け入れ先を拡大するためにも今後は検討が必要と思われます」とのことであった。

## 7) 短期集中型研修の期間についてのご意見・ご要望および研修全体についてのご意見・ご要望

短期集中型研修の期間について「当市までの距離が遠く、行き帰りの時間や学生の負担を考えるとやむを得ないものと考えます。期間を長くすれば良いというものではないことと大学においても事前研修等を行っているとのことですので、現在の取り組みでよろしいものと考えます」とのことであった。

研修全体について「何を学びたいのか、実習の目的をしっかりとった学生が参加しているので、事業所としても受け入れに協力的と思われる。当市としてもできる範囲で協力していきたいと考えて

います」とのことであった。

#### 8) 市担当者へのアンケート調査の考察

以上のように、研修の主体的なプログラムの作成および、実施、評価までを包括し、かつ担当者の配置や移動の際のバスの手配など、研修の実質的な運営のみならず、本研修を外部評価の1つとしてとらえてくださり、研修の受け入れに好意的な意義づけと、現在の研修日程や内容に肯定的な感想をもっていらっしゃる事が明らかとなった。

#### (4) 実習施設へのアンケート調査およびヒアリング調査

研修3日目および4日目の施設実習、在宅介護実習を受け入れていただいた施設に対して、短期実習を受け入れるにあたっての施設側の意識を知るために、本学参加学生がどのような実習を行ったか、施設側の実習受け入れの意識などについてアンケート調査を行った。

また、アンケート回答施設の中から「ヒアリング調査」について了承を得た2施設に対してヒアリング調査を行った。ヒアリングは、アンケートの中の項目をさらに深くお聞きするために20分～30分程度行い、その内容をメモに取りまとめた。回答施設によっては、本学以外の実習生とあわせてのご回答や、昨年度までの本学実習生と比較してのご回答もあったが、そういった「実習全体の課題」や「本学の研修のこれまでの課題」もあわせて、本研修を位置づけたご意見と判断し、あわせて記載することとした。

##### 1) アンケート調査

###### ①実習を受け入れる意義について

Q1とQ2で、実習を受け入れる意義と方針についての質問をした。通常の実習を受け入れるにあたっての意義や方針と今回のような短期間の実習の受け入れについての受け入れの意義や配慮にどのような違いがあるかをみるためである。

その結果、受け入れの意義や方針に違いがあると答えた施設と違いがないと答えた施設は同数となった。具体的な違いは以下の表8の通りである。施設によっては、短期の場合には通常実習ほど複雑ではない内容となっている。

###### ②実習生の学びと課題について

実習生の学びと課題については、様々な点が指摘された。学びについては、「現場や利用者の理解」とする施設が多かった。一方、課題については、「利用者との関わり」「質問が少ない」「何を学びたいのか伝わらない」など、意欲や研修前の学習も含めた事前の学習について課題があげられた。

###### ③実習生の意欲・態度

実習生の意欲・態度は、上記の課題からもわかるとおり、「どちらともいえない」という施設が2施設あった。

表8 受け入れの意義や方針

	通常の実習を受け入れる意義・方針	短期の実習等を受け入れる配慮
D 施設	高齢者へのサービス提供するにあたっては、ケアの技術を向上させ、確立することが必須です。それには何といたっても現場でのケア体験を通し利用者から学び、その体験を蓄積することが基本であると思います。実際利用者に関わり仕事内容を理解していただくため、実習生の受け入れをしております。	事故のないよう、事故にあわないう気をつけています。実習生の目的に合うような内容を現場から伝えられるよう心掛けています。
G 施設	1. 法人の活動や理念について理解してもらおう。2. 生活支援の試みの実態を理解する。3. 既存の福祉の概念にとらわれない考え方を身につける。	1. 法人の活動の理念を理解してもらえるプログラムを作成する。2. 法人の事業の実態の中からポイントをしぼって考え、効果を得られるように利用者様方と接する時間を設定する。
C 施設	受け入れの際には申込書を提出し、その中で個人情報の取扱いを遵守していただく。	特に感情の起伏がある場合などの情報提供や対応について。

表9 実習生の学びと課題

施設	学 び	課 題
D 施設	様々な利用者、現場を体験することで、幅広く経験することができたと思います。	コミュニケーションのとり方についてもう少し学んでいただきたい。
I 施設	実際の現場で、利用者にも様々な人が居る(寝たきりの方、普通に生活されている方)という事がわかったという感想が聞かれた。	何を学びたいのかが伝わってきませんでした。1 日しかないので何でも聞いて何かを吸収して行って下さい。
G 施設	福祉の現場を知るという事についてはよい経験になったのではないのでしょうか。	これから多くなると思われる認知症利用者に対する対応など
E 施設	法人独自の活動や事業について関心を持ち、福祉の学習をして行く上で、新しい刺激を受けられた事(感想文より)。その上で「新しい福祉制度について考えなければならない」という課題を各々が持てた事。	高齢者の方とのコミュニケーションのとり方(実習生2人に限らず)。大学の勉強をしていることを考えあわせてみると質問が少なすぎる点。
H 施設	利用者宅に訪問させていただきにあたって、挨拶や言葉使い等、マナーの重要性を感じた様です。又、いろいろな社会資源を利用して、在宅療養生活ができる事を学ばれた様で、とても良い体験になったと思います。	社会の動きにもっと目を向けていくてください。

表10 実習生の意欲・態度についての印象

「意欲的である」という回答をした施設	
A 施設	利用者の反応を気にしながら、一生懸命話題を考え話しかけたり、歌ったり、楽しい雰囲気を作っていました。
C 施設	高齢者に対して「その人らしさ」を受容しながら良く知ろう、理解しようとする対応がとても良かったと思います。
G 施設	質問は少ないが、子どもや高齢者さんなど、利用者の皆さんとのコミュニケーションをとろうという姿勢は見られた。 急な取材(地元テレビ局)にもインタビューに理論的に答えていたので実習の意義・自主性は理解していたのだと感じた。
H 施設	マナーが良く、疑問点は質問する等、興味深く実習していました。
「どちらともいえない」と回答した施設	
D 施設	緊張していたのと、利用者の言葉がわかりにくかったようで、若干積極性に欠けていたようです。
I 施設	「おとなしい」という印象があります。もっと質問があっても良かったと思います。

## 2) ヒアリング調査の結果

### ①調査対象施設

アンケート回答施設の中で、承諾してくださった2つの施設に、電話でヒアリング調査を行った。調査日は2007年12月12日、お話を伺った時間は、それぞれ20～30分程度である。ヒアリングの結果は、メモに取り、その内容を施設ごとにまとめた。ヒアリング調査の質問項目は、表11の通りである。なお、施設名は上記表2に基づいている。

表11 ヒアリングの質問項目

a)長期実習、短期実習の受け入れ実績とそれぞれの意義等について
b)アンケートで学生の課題にあげた内容の具体的説明
c)事前の調整に関するご意見等
d)実習を通して学んでほしい内容
e)その他

2施設とも他校の実習生も含めた、実習生全般に関するご意見が多かった。共通していた点は、「利用者とのコミュニケーション」「自主性・積極性」に関する課題だった。そして、その積極性は実習生からの「質問」として、形になってあらわれることが指摘されていた。さらに、施設や法人の理念や内容に関する「理解」が実習の到達点となることもおおむね共通していた。

また、研修前の詳細な「情報の共有」や事前学習の段階での「施設の事業の理解」も課題としてそれぞれの施設からあげられた。これらは、実習生を送り出す学校側の課題といえる。

**a)長期実習、短期実習の受け入れ実績とそれぞれの意義等について**

長期的実習は、たとえばヘルパー実習や社会福祉士実習がある。短期的実習は、夏休み等のボランティア体験や看護学校の1日体験授業がある。受け入れ側としては、明確に長期と短期では受け入れる意義が異なっている。短期的実習に参加するならば、教科書で勉強してくるのは前提となるが、コミュニケーションについて学んできてほしい。

**b)アンケートで学生の課題にあげた内容の具体的説明**

**Q4「コミュニケーションの取り方が」とはどのようなことか**

利用者とお話ししながら、利用者の背景まで見たり、地域性の違いを感じたりしてほしい。コミュニケーションで大切なのは、第一印象や笑顔である。声をかけやすい、話しかけやすい雰囲気も求められる。緊張していることもあるだろうが表情が硬い。

**Q5「積極性」にかけていたのはどのような部分であるか**

以前の学生と比べて、積極性に欠けているように思われる。何でもいいからとにかく飛び込んで、自主的に取り組む姿勢が求められる。初めころはもっとやる気が見られた。それは、質問の量にあらわれている。以前は施設の役割についての質問が出たこともあった。

**c)事前の調整に関するご意見等**

初めの頃の方が、市からも学校からも詳細な連絡が入っており目的が明確になっていた。どのような人材を養成してほしいかについては、人間性に重きを置いた人材養成を求める。

**d)実習を通して学んでほしい内容**

長期的実習:地域の福祉、高齢者・障害者・地域との関わりなど、社会福祉協議会の役割について学び、知ってもらいたい。

短期的実習:分野が偏った体験とはなるが、それまで学んできたこと、教科書・理論とのちがいについてご理解いただきたい。人と人との部分になってくるそのため、相手を思う気持ち・相手をどう考えるかが大切だ。そのあたりを利用者の方から学んでほしい。そして不明な点は職員に聞いてほしい。

**a)長期実習、短期実習の受け入れ実績とそれぞれの意義等について**

これまでの実習の受け入れは、すべて短期的実習(看護学校／福祉専門学校(社会福祉主事)／公立大学看護学科)であった。実習生に求めるものは、法人でやっているすべてを理解してほしい。大きな法人ではできないような支援も行っている。小規模の居宅介護、「たすけあいささえあい」が理念。ちょっとこまっているところを支援する。高齢者だけではなく、子どもや障害者など地域のちょっとたすけての支援をしたい。こうした理念や実践を短い時間ではあるが、理解してほしいと思っている。実習に入る前にも実習生にはお話ししている。

**b)アンケートで学生の課題にあげた内容の具体的説明**

「コミュニケーションの取り方が」とありますが

コミュニケーション;初めてなので何を聞いてよいかとおっしゃるが、自分が初めての人と知り合う時にどう挨拶するか、自分の名前や出身地を自己紹介してから。話しかけられるのを待つのではなく、積極的に。構える学生が多いと思う。個人情報保護を意識しすぎなのではないだろうか。初めての人にあいさつするときのマナー。話しはじめたら、聞き役に徹する。あいづち、目をみながらなど。

「勉強しているはずなのに質問が少ない」とありますが

一般的に見て質問が少ない。専門知識を下地に、下準備をどれだけしているか。施設の事前情報をどれだけ仕入れるか。その施設の行っている事業の概要。来て初めてこういうこともしているのですかと感心される人がいるが

**c)事前の調整に関するご意見等**

実習生の情報は、性別や氏名などで十分である。反対に学校として、どれだけ実習先の情報を実習生に伝えているか

**d)実習を通して学んでほしい内容**

より広い意味の高齢者福祉を知ってほしい。高齢者支援の種類、現在の問題、利用者、制度等の矛盾も知ってほしい。高齢者は高齢者、子どもは子どもという分けた支援ではなく、地域の交流の中で、総合的な支援の制度があればいいと感じられる実習になればいい。

3) 施設への調査（アンケート／ヒアリング）の考察

施設への調査からは、次の3つの点が明らかとなった。第1に、1日という「短期の実習の中での積極性と学びの必要性」である。長期であれば、だんだんとわかってくることもあるが、時間に余裕のない短期の実習では、第1印象と、一瞬を逃さない視点が要求されている。そして、第2に事前学習および、通常の授業等における研修前の実践的学びの必要性」があげられる。これも短期の実習ということで、ポイントを絞った事前の準備が問われることになる。さらに、ヒアリング調査などから、参加学生の「積極性」と「コミュニケーション」という課題が浮かび上がった。

## 4. 考察

### (1) 達成された学びについて

#### 1) 利用者からの学びについて

参加学生が、様々な状態の利用者（施設・在宅）から多くの側面を学んだ。たとえば、施設であれば、「利用者の生活」「コミュニケーション」などに関することだった。また、在宅介護の現場からは「職員と利用者の関わり」や「利用者の生活・家族」などであった。さらに、利用者側からの働きかけによって、会話がスムーズになり、実習中話せるようになったとふりかえる学生もおり、こうした短期間の実習の場合には当事者からの働きかけはたいへん重要なものとなった。

上記のような学びは、短期間に集中して行う本研修の長所が出ている。また、同行した仲間が存在やその日の夜のふりかえりによって課題や情報を共有できたことが大きいことがわかる。

#### 2) 受け入れ行政・受け入れ施設からの学び

実習受け入れ施設やその職員から学んだことは、「見送りの際の手を振る行為」、「利用者との関わり」、「利用者への細かい配慮」など、職員の後ろ姿から学ぶ、あるいは伺ったお話から学ぶ機会が多かった。特に訪問介護（看護）実習の際には、仕事の様子を事細かに観察することができていた。また、掲示物や施設等の環境から大切にしていることなどを学ぶ姿もみられた。

一方行政から学んだことは、「福祉行政に興味や理解」がみられたことが大きい。これは、市長をはじめ市の担当者が積極的に学生に関わっていただいた結果でもある。また、消防署の災害弱者救済のためのシステムや介護予防健康教室への参加など、これまであまり直に学ぶことのなかった領域を紹介していただいたことも大きな学びとなった。

### (2) 明らかとなった課題について

#### 1) プログラム・参加学生の課題

事前学習や事後学習の目的、方法、内容と回数については、改めて課題が残った。初期のころのような事前の施設への情報提供や施設からの情報提供もあわせて必要であることが明らかとなった。

また、参加学生の課題については、施設へのアンケートで「明るくはきはきしていた」ことが評価されていた半面、「積極性」と「コミュニケーション」の問題が明らかとなった。中心が実習前の学生だったこともあり、緊張していたことの原因であるが、利用者の方や職員の方とのコミュニケーション、とりわけ笑顔と話しかけること、わからないことを質問するなど、基本的な関わりは意識していかなければならない。このためには、初めての施設実習に戸惑わないだけの事前の情報と施設の事業に関する学習が求められる。通常の授業の質やそれぞれの経験も問われるが、今後一層の事前学習の充実がもとめられる。

### (3) 次年度プログラム計画作成のための提言

#### 1) 次年度事前学習の提案

事前学習に関しては、まず第1に、実習生の不安を軽減するためにも、専門性を高めるスキルの確認が求められる。そして、個々の状態を把握した上で、実習に必要な最低限求められる専門的な知識

や技術の習得が求められる。また、第2に、配属される施設の事業等に関するポイントを絞った施設理解が求められる。短期間の実習のため、事前に把握できるところは把握して臨みたい。さらに第3として、コミュニケーションや積極性など、それぞれの人間関係のスキルを高めるような学びの必要性があげられる。これらのポイントを次年度研修の計画作成の際には、勘案する必要があるだろう。

したがって、事前学習の回数や実施時期、学生の学年や学び経験の異なる背景など個別のニーズへの対応をどのように行うかには配慮を要する。

## 2) 次年度研修プログラムの提案

次年度のプログラム計画時には、次の2点を考慮する必要がある。第1に、実習施設の種別の検討である。これは、これまで、介護保険の流れの中で高齢者施設に限定した形で行われてきたが、「宮古市の福祉」の体験と理解の研修にとらえると、受け入れ先があればという条件があるが、より幅の広い学びが可能となるのではないだろうか。受け入れ先の事情を勘案した上で、必要であれば実習施設の種別や範囲を検討してもよいだろう。

第2に、実習期間の長さの検討があげられる。参加者の中からは実習期間が短いとの声が上がっていた。これは、2日間の実習では、学びたかったものを吸収するには短かったということの表れでもある。同法人に同じメンバーで実習に行くなど形態の工夫や、日数の延長など2日間の実習のあり方の検討は必要となるだろう。

## 3) 次年度事後学習の提案

事後学習にあたっては、開催時期と内容の検討が求められる。研修先でのふりかえりはその日の夜など随時してきたが、まとめて研修自体を振り返る機会の回数や内容の設定に工夫が求められる。また、一人ひとりの研修ノートを作成しなかったが、そうしたふりかえりの要素となる文書の作成についても検討する必要があるだろう。

## [引用・参考文献]

- ①石井章仁・江村綾野「子育て支援の専門性を培うための保育士養成カリキュラムについて」平成16年度東京都私学財団学校助成事業報告書 2005年
- ②石井章仁「保育士養成校における子育て支援の専門性を培うための体験的学習について—おひさま広場の活動を通して—」『保育士養成研究第23号』2005年
- ③石井章仁「子育て支援の専門性を培うための体験実習について」平成17年度東京都私学財団学校助成事業報告書 2006年
- ④笠間浩幸「大学と地域の子育てニーズをつなぐ教員養成の課題」『教科教育学研究第18集』2000年
- ⑤清水正美『市民参加による福祉計画づくりにおけるプロセスと課題について』城西国際大学紀要 人文学部第12巻第2号2004年3月
- ⑥全国保育士養成協議会専門委員会平成17年度課題研究「保育実習のミニマムスタンダード」社団法人全国保育士養成協議会 2005年
- ⑦矢木・坪井・清水・林・矢野『社会支援ネットワークの構造と機能に関する実証的研究』城西国際大学 学長所管研究奨励金研究（共同研究）報告書 2004年

## 謝辞

平成19年度「福祉文化環境研修」実施にあたって、ご尽力いただいた岩手県宮古市長、福祉部長、介護保険課長、宮古市役所職員の皆様、ならびにご協力いただいた実習施設、保健センター等実習生受け入れ機関の皆様に感謝を申し上げます。

《資料》

### 1. 参加学生アンケートの項目

Q1 参加したきっかけを下記から全て選んで○をつけてください。(複数回答可)

- |                   |                    |
|-------------------|--------------------|
| 1 宮古市の福祉に興味があったから | 2 現場での実習を体験したかったから |
| 3 先生や友人に勧められたから   | 4 研修全体の内容が魅力的だったから |
| 5 実習の内容がよかったから    | 6 旅行や観光ができるから      |
| 7 就職先の業種を考えるため    | 8 友人が参加していたから      |
| 9 高齢者介護に興味があったから  |                    |
| 10 その他 ( )        |                    |

Q2 この講座を受けるにあたって、あなたの家族と相談をしましたか。

- 1 した 2 しない

\* SQ1 「1 した」とお答えになった方にお聞きします。その際に、どのような相談をしましたか。

Q3 研修の内容についてお聞きします。あなた自身の満足度の高かったもの3つに順番をつけて、それぞれその理由もお答えください。

内 容	順番	理 由
市役所での事前学習(市長・課長の講義)		①
施設への挨拶回り・消防署等宮古市内の見学		
1日目の実習( )		②
2日目の実習( )		
実習のふりかえり(夜)		
保健センターでの健康教室		
市役所での発表		③
その他( )		

Q4 この研修をうける前に、あなたが学びたかったことはどのようなことですか。あてはまるもの全てに○をつけてください。(複数回答可)

- |                |               |              |
|----------------|---------------|--------------|
| 1 高齢者福祉の実際     | 2 高齢者福祉の意義・理念 | 3 子どもについての理解 |
| 4 地域福祉についての理解  | 5 援助者の専門性について | 6 高齢者福祉の事例   |
| 7 家族についての理解    | 8 介護予防について    | 9 情報提供について   |
| 10 訪問介護の実際について | 11 虐待防止について   | 12 相談援助等の実技  |



Q14 その他、研修全体の内容、運営などについて、ご意見等がございましたら、ご自由にお書きください。

## 2. 施設へのアンケート項目

Q 1 実習の依頼を受ける際の施設独自の意義や方針などはございますか。あてはまるものに○をつけて、以下に簡潔にお答えください。

- 1 ある \* SQ 1-1 どのようなものか以下にお書きください
- 2 とくにない

Q 2 今回の実習は、1日のみでしたが、このような短期間の実習の場合、特に配慮していらっしゃる点などはございますか。

- 1 ある \* SQ 1-1 どのようなものか以下にお書きください
- 2 通常の実習と変わらない

Q 3 実習生の学びについて、効果的だったと思う点はございましたか。

Q 4 実習生の学びについて、課題だったと思う点はございましたか。

Q 5 依頼の方法や事前の打ち合わせなど、運営面についてのご意見等、ご要望などがございましたらお答えください。また、実習の時期、期間、人数などについて、特筆すべきことがございましたらお書きください。

Q 6 参加者の参加意欲、実習態度等についてどのように思われましたか。

- 1 意欲的に取り組んでいた。
- 2 どちらともいえない
- 3 気になる点があった。

\* SQ 6-1 それぞれについて、そのようにお感じになられた理由をお書きください。

Q 7 本実習全体について、ご意見等、ご要望、アドバイス等ございましたらお答えください。

Q 8 〈フェイスシート〉回答していただいている方について、施設名と職種（職位）をお書きください。

施設名 \_\_\_\_\_

回答者の職種 \_\_\_\_\_

Q 9 〈ヒアリングのお願い〉

○アンケートを基に、30分程度の簡単な電話によるヒアリング（聞き取り／インタビュー）をさせていただきます。ヒアリングに協力していただけるかどうか、下記に○をつけてください。また、協力していただける場合は、氏名および、可能な時間とご連絡先をお書きください。

- 1 ヒアリングに協力できる\*\*

\*氏名（職種） \_\_\_\_\_

\*可能な時間・曜日など 曜日 \_\_\_\_\_ 時間 \_\_\_\_\_

\*ご連絡先

---

2 ヒアリングに協力できない

3. 受け入れ行政へのアンケート項目

問1 これまで福祉に関する実習や研修の依頼を受けたことがございますか？

- 1) ある
- 2) ない

問2 実習や研修を受け入れるにあたって、行政としての方針等がございますか？

- 1) ある  
※どのようなものかお書きください。
- 2) とくにない

問3 本学の地域文化環境研修を受け入れるにあたって行政としてメリットと判断されたことなどがありましたか？

- 1) あった  
※どのようなものかお書きください
- 2) とくにない

問4 本学の地域文化環境研修を受け入れ、スケジュール内容等をきめるにあたって、配慮したことなどがあればお書きください。

問5 本学の地域環境研修を受け入れるにあたって、連携をとった行政内の部署名を教えてください。

問6 実習を受け入れた各施設などへの連絡・連携などで配慮していることがありましたら教えてください。

問7 今年度の地域環境研修で、学生に対して効果的だったと思う点がございましたら教えてください。

問8 今年度の実習で、課題だったと思う点がございましたら教えてください。

問9 依頼の方法や案内、事前の打ち合わせなど、運営面についてご意見やご要望がありましたら教えてください。また、実習の時期、期間、人数などについても、特筆すべきことがありましたら教えてください。

問10 本学の地域環境研修は実質4日間という短期集中型研修ですが、この期間についてご意見やご要望がありましたらご自由にお書きください。

問11 研修全体にご意見やご要望などがございましたらご自由にお書きください